

今回特集になっている骨粗鬆症に対する治療というのは、われわれにとって、ちょっと特殊な分野のような気がします。

- ・そもそも疾病の治療というものは、がん治療を除いての話ですが、時間が解決してくれなければ、生活習慣などで治すのが原則でありましょう。
- ・それでもダメなときには、外科手術を優先することなく、人間の生理（病態生理）に基づいた薬物療法や理学療法など、保存的加療と称するものが行われるのが基本だと思います。
- ・これらの治療がどうしても効果不十分で日常生活上支障をきたす場合には、外科手術が介入することがある。

多くの診療分野では、この薬物治療と外科治療の担当医師などが異なり、そもそも治療方針そのものの方向性などが異なっていますし、それに伴い、内科的加療から外科的治療への移行のタイミングなどもなかなかスムーズに行かないことも多々あります。ま、これは複数の医療者が関わっていれば大なり小なり避けて通れないところではあります。

一方、ほかの診療分野では、このような内科系-外科系の連携というプロセスが明らかでないような領域も存在します。眼科の診療などは、学生時代に拝見したときからそのように思いました。耳鼻咽喉科の分野なども然りかもしれません。たとえば、緑内障治療は点眼薬治療を優先して行うわけですが、どうしようもなければ、同じ医師が判断して緑内障手術を行うことになるわけですね。

脊椎脊髄分野においても、この骨粗鬆症は、主に整形外科の先生方が薬物療法という保存療法も担っていることが多いです。当然といえば当然ですが、そして、場合によっては、自ら手術療法も行うという一連の流れがあるかと思います。

その意味からは、本来、外科臨床家である本誌の多くの読者は、今回、松山先生が提言してくださったように、ことのほか薬物療法をはじめとする保存的療法に関して精通しておく必要があるんだろうなと思いました。もっとも日本の整形外科分野はもともと保存的治療を重んじ、安易に外科治療に流さないという望ましい姿をもっていると僕個人は思っております。とはいえ、同じ整形外科の中でも、かかりつけ医と専門医との間での問題もあるでしょうから、このような企画を通して、その不要なギャップが埋まっていくことを門外漢ながら願っております。

(谷 論)

脊椎脊髄ジャーナル

編集顧問

萬年 徹 高橋 昭 金田清志
 小山素麿 小柳知彦 田代邦雄
 国分正一 服部孝道

編集委員

山崎正志（編集委員長）
 金 彪（副編集委員長）
 青木茂樹 亀山 隆 園生雅弘
 高橋敏行 谷 論 筑田博隆
 永島英樹 中村雅也 根尾昌志
 原 政人 飛驒一利 松山幸弘

Vol. 33 No. 12
 (2020 年 12 月 25 日発行)

毎月 1 回 25 日発行

1 部定価（本体 2,500 円＋税）

（配送料別）

年ぎめ予約購読料 33,300 円＋税

送料弊社負担

発行／株式会社 三輪書店
 代表者 青山 智

〒113-0033

東京都文京区本郷 6-17-9

本郷網ビル

TEL 03-3816-7796

FAX 03-3816-7756

URL <http://www.miwapubl.com/>

（担当：山岸）

印刷所／三報社印刷株式会社

TEL 03-3637-0005

広告申込所／

（株）文栄社

TEL 03-3814-8541

（株）ハイブリッジエージェンシー

TEL 03-3814-0089

本誌の内容の無断複写・複製・転載は著作権・出版権の侵害となることがありますのでご注意ください。

Published by MIWA-SHOTEN Ltd.
 6-17-9 Hongo, Bunkyo-ku, TOKYO © 2020,
 Printed in Japan

JCOPY 〈出版者著作権管理機構 委託出版物〉

本誌の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつど事前、出版者著作権管理機構（電話 03-5244-5088, FAX 03-5244-5089, e-mail: info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。